

2026 AUTOBACS SUPER GT Round1 OKAYAMA GT 300km RACE

Round 1 岡山国際サーキット

apr GR86 GT

apr

Racing Constructor

apr

Racing Constructor

2026 AUTOBACS SUPER GT Round 1

開催地：岡山国際サーキット（岡山県）／3.703km

4月11日（予選）

天候：晴れ コースコンディション：ドライ 観客数：9000人

4月12日（決勝）

天候：晴れ/曇り コースコンディション：ドライ 観客数：16500人

速さを示した予選、決勝のロングランも安定。次戦に向けて高まる期待

2026年シーズンの30号車は、5年目を迎えて熟成の域にあるGR86 GTを継続して使用。タイヤは昨年のミシュランから、2024年まで使っていたヨコハマに戻した。ドライバーラインアップにおいては、第1ドライバーの永井宏明に変更はなく、第2ドライバーとして平良響が加入。織戸学が第3ドライバーとして長距離レースに備える布陣で挑む。

平良はGR86 GTのデビューイヤーとなった2022年、30号車の第3ドライバーとして3戦をともに戦った過去があり、そのなかの第5戦鈴鹿では3位表彰台に登壇。その後はライバルとしてGR86 GTを走らせて優勝を果たし、国内トップフォーミュラであるスーパーフォーミュラにも参戦。多くの経験を積み、4年ぶりのapr復帰となった。

今季はオフシーズンのテストから好調なスタートを切った30号車。開幕戦岡山でも、上位入賞を目指す戦いになる。

公式練習／4位 4月11日(土)9:30～11:25

2024年シーズン以来となるヨコハマタイヤだが、当時のセッティングデータをベースに、車両とタイヤの進化代をアジャスト。オフシーズンのテスト同様、公式練習でも走り出しからバランスが良い。

最初にステアリングを握ったのは平良。アウトラップでバランスを確認し、そのままピットイン。コースコンディションが上がるのを待つ。だが、その間にコース上でストップする車両があり、赤旗中断となった。再開後、平良はじっくりとタイヤを温め、計測6周目にアタック。1分26秒647はこの時点で2番手タイムであった。

11周目からは永井が走行。30号車は今回、同スペックのタイヤを4セット持ち込んだ。公式練習スタート時の気温は18度、路面温度は24度と、この時期としてはやや高めのコンディションだったが予想は的中。永井も予選アタックに向けてニュータイヤを履き、早々に好タイムをマークする。その後、ロングランになるとアンダーステアの症状が出はしたが、セッティングの微調整で対応した。

10分間のGT300専有時間では、再び平良がステアリングを握る。タイヤはユーズドで、6周目に記録したタイムを更新することはできなかったが、リザルトは4番手と上位に着けた。ロングランを担当した永井とともに、予選の速さ、決勝の安定した走りに手応えを感じて公式練習を終えた。



<公式予選>

公式予選 4月11日(土)
Q1 B/2位 14:18~14:35
Q2/17位 15:14~15:24

予選Q1はB組に出走し、平良が担当。予選開始時のコンディションは気温が25度、路面温度は34度まで上昇していた。

平良がウォームアップを続けていた3周目、他車のストップにより赤旗が提示される。およそ5分30秒の中断後、残り6分でセッションは再開となった。2周でタイヤを温め、計測6周目にアタック。1分25秒576というトップタイムをたたき出す。その後、トップを奪われてしまうが、その差はわずか0.054秒。セクター3では全体ベストも刻み、B組2番手でQ1を突破した。

Q2にはQ1のA/B組から各上位9台が進出。永井はタイヤを温めながら徐々にタイムを上げていった5周目、セクター1ではQ1平良のタイムを上回る快走で1分26秒398を記録。結果として17番手となったが、プロドライバーが居並ぶQ2で引けを取らない走りを披露。決勝入賞の15位を射程圏に捉え、期待高まる予選となった。





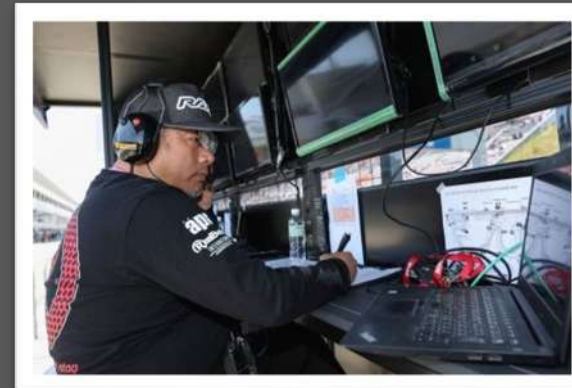
永井 宏明選手

公式練習ではアンダーステアを感じる部分もありましたが、予選に向けてチームが調整してくれて、その症状は消えていました。Q1の平良選手はすごく速かったですよね。僕が担当したQ2はブレーキタイミングがズレて完璧ではなかったですが、ヨコハマタイヤのグリップは常に高く、決勝も期待できると思います。



平良 響選手

オフシーズンテストからのデータを活かして、クルマもヨコハマタイヤも走り出しから良好でした。予選に向けてはクルマが曲がる方向にセッティングして、アンダーステアも解消されました。僕のアタックでは、2コーナーとヘアピンで少し行き過ぎてしまって……。それがなければトップ通過だったと思うし、自己採点では80点のアタックでした



金曾 裕人監督

1年強ぶりのヨコハマタイヤの進化を感じ、そこに平良選手の違った視点からの評価が加わって、良い状態で開幕戦に入ることができました。苦しんだ昨年も無駄ではなく、チームとして成長することができました。予選Q1は、さすが平良選手ですね。本人はミスがあつて悔しいと言っていますが、気持ちよくアタックしてくれたと思います。Q2の永井選手も素晴らしかった。1分26秒台の前半で走れるなんて、ジェントルマンドライバーの域をマジ超えています(笑)。30号車は、まだまだ速くなりますよ！

決勝レース(77周)／22位 4月12日(日)13:25～15:20

前日の予選日同様、晴天に恵まれた決勝日。気温もほぼ同じ24度だったが、路面温度は39度まで上がっていた。

スタートドライバーは永井。スタート直後の混戦で、3周目には21番手に順位を落としてしまうが、隊列が整うと好タイムで前車を追いかけていく。ところが、GT500にラップダウンされるタイミングとなった6周目、ヘアピンコーナー立ち上がりからリボルバーコーナーにかけて他車と接触、コースオフを喫してしまう。自力でコースに戻れたが、最後尾までドロップしてしまった。幸いにもクルマに大きなダメージはなく、後方から追い上げを図る。11周目と14周目にはそれぞれひとつ順位を上げ、27番手を走行する25周目にピットに入った。

チームは給油とタイヤ交換をスムーズにこなし、後半のロングステントを平良に託す。平良は28番手でコースに戻ると、上位陣と遜色のないタイムで周回を重ねる。ライバルのFIA-GT3車両とはキャラクターが違い、コーナーはGR86 GTが速くてもストレートでは劣勢にある状況で、ヘアピンコーナーやダブルヘアピンのアウトから抜き去り、最終的には22位でチェッカーを受けた。

永井も平良もロングランは安定しており、レーシングアクシデントの接触がなければ入賞は見ていただけに悔しい結果ではあるが、次戦に向けて期待を高められるレースだった。





永井 宏明選手

GT500を譲り、ラインを戻した時に死角に入ってオーバーテイクを狙っていた後続車と接触し、スピンしてしまった。マシンパフォーマンスもタイヤパフォーマンスも高かっただけに、もう少し慎重にバトルすれば展開は変わっていました。今年のポテンシャルは高いことが分かったので、毎戦確実に上位チェッカーを狙い、ポイントを重ねたいと思います。



平良 響選手

僕のステイとは上位陣にラップダウンされる状況にあったので、譲るために自分のペースで走れない時間もありましたが、上位を争えるタイムは安定して刻めていたと思います。コース上ではコーナーの外側から抜くことが多くて、自分としてはどれも良いバトルで、結構かっこいいオーバーテイクだったと思います(笑)。結果は22位でしたが、クルマのポテンシャルが高いことは感じたので、次の富士が楽しみです



金曾 裕人監督

レーシングアクシデントで順位を落としてしまいましたが、その後の永井選手も、後半担当の平良選手もロングランのAverageタイムは良かったし、久しぶりのヨコハマタイヤでしっかりとデータを取れたのが収穫。ペース的には入賞圏内で戦えることも分かったので、次の富士に期待してください！